

「その時には完全に知るであろう」

イースター礼拝

その朝、数人の女性達がイエス様の墓に向かっていました。その体に香料を塗るためです。しかし、墓まで来てみますと、墓をふさいでいた大きな岩はどけられて、墓の中にイエス様のからだはありませんでした。思いがけないことに途方にくれていますと、輝いた衣を着たみ使いがあらわれ、彼女たちにこう告げたのです。

『あなたがは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ』（ルカ24章5節、6節）。

この日から全てが変わりました。この出来事は今、この場所にいる私達の人生に変革を与えました。イースターの朝、今日はこのイエス・キリストの復活が私達にもたらしたものについてお話しします。

もし、私が聖書の著者であり、「聖書を読む人達が皆、神という存在を信じ、その神と共に歩むなら、どんなに素晴らしい人生を送ることになるか」ということを伝えようと願いながら聖書の執筆をしているのなら、あえて聖書に書き残さなくてもいいかなと思うことがあります。

それは読者を悩ましたり、つまづかせてしまうようなこと、ほれみる、やっぱり聖書はおとぎ話じゃないかと思わせてしまうようなことです。もし、それでも書く必要があるのなら、本当にちょっとだけ、さらりと短く書くだけにしておこうと思うのです。

しかし、実際の聖書を読む限り、聖書は我々、読者に対してそのような気配りを一切していないかのように思えます。すなわち、これを書いたら、人々はもっと神を遠い存在として感じてしまうかもしれないということが、あちこちに書かれているのです。

モーセというリーダーが聖書には出てきます。彼は偉大な神の器であり、彼ほど神に忠実に仕え、また同胞のイスラエルの民に貢献した人は後にも先にもいません。彼はエジプトで奴隷となっていたイスラエルの民、数百万人を解放した英雄であり、忍耐の限りを尽くし、仕える僕としての生涯を全うしました。

そんな立役者には普通、相当の報いがあるしかりと私たちは思うのですが、彼はイスラエルの民と共に目指した約束の地、カナンに入ることを神によって許されずに、カナンを前にして息を引き取りました。これは人間的に考えたら理解に苦しむことです。諸々の困難の矢面に立って、民の先頭を歩いてきたのは彼なのですから、夢にまで見たカナンの地に入るといふ報いを受けるのは当然です。

バプテスマのヨハネはイエス・キリストが活動を始める前に生きた預言者です。彼ほどに自分の命の役割をわきまえていた人はいません。その生涯は、明らかに世の楽しみからかけ離れたものであり、ただひたすらにイエス・キリストの露払いをする僕として、生涯を歩みました。イエス様はそのヨハネをこう評価しています「女の生んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起こらなかった」（マタイ11章9節）。

しかし、そのヨハネの生涯の最後は悲惨なものでした。ユダヤの領主ヘロデは自分の誕生日に一人の娘がその祝いの席で踊った踊りに喜び、「お前の願いを何でも聞こう」と言ったのです。それに対して彼女は「バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、ここに持ってきてくれ」と求めたのです。そのおよそ受け入れられない愚かな願いをヘロデは人の前に誓った手前、自分の面子のために受け入れ、直後にヨハネの首をはねられ、それが盆にのせられました。

私たちは思います。なぜイエス様から最大の賛辞を受けている彼が、愚かで気まぐれな親子の酒の席でなされた願いによって、また王のどうでもいい面子によって、首をはねられなければならないのだろうか。

このモーセとヨハネは、明らかに神のために生きた人達であり、神からの報いということにおいては、普通に考えれば神様から最大の報酬を受けることに異議を唱える人はいないはずですが、しかし、彼らの地上での生涯において、神からの報酬はなく、かえって彼らの最後は、すなわちその人生の最後は「どうして、こんな最後なのか」というようなものだったのです。

そして、この「どうして、この人が、このように・・・」ということは聖書中の人物だけに起きることではなく、私やあなたの身近でも起きることなのです。

私の知っている宣教師にジョン・トローゼンというアメリカ人がいます。正確に言いますと「いました」ということになります。パイロットであっ

た彼は物流が行き届かない密林で宣教する宣教師達へ小型飛行機で聖書や生活必需品を運んだり、自らも宣教師として、南米にて働いていました。

パイロットの資格がありますゆえに、望めばそれなりに経済的に安定したよい職につくこともできたでしょう。しかし、彼はその宣教の思いを南米大陸に向けたのです。その彼が操縦する飛行機が、1998年9月28日、南米ボリビア奥地で福音宣教のために働いていた現地の牧師と神学生夫妻、パイロット宣教師一家ら7人を乗せ、アンデスの村を飛び立ったまま消息を絶ちました。

懸命の捜索にもかかわらず手がかりが得られないまま今年で20年がたちます。ジョンさんは当時28歳、妻の真砂子さんは35歳、二人の幼子、翼ちゃん、光ちゃんもその飛行機に同乗していました。あえて言うまでもなく、この家族の未来はこれからであったと誰もが思います。彼らは長い準備の末、現地に派遣されてからわずか9か月後に突然その働きが絶たれたのです。

12年前の3月21日、神奈川県相模原市でイーヨンヒさんという方の葬儀がもたれました。まだ40代で奥様とまだ小さい3人の子供を残して彼は天に帰りました。イーさんは日本で何をしていたのか。彼は韓国から日本宣教に重荷を感じて、こられていた宣教師でした。私は彼と共に神学校で学びました。静かな方でしたが、いつも顔に笑みをたたえ、日本宣教に対する情熱を持っていました。

住み慣れた国を離れて、異国への伝道に向かったこれらの人達の生涯は神に捧げられたものでありましたが、自分達の思い描く生涯を送ることはありませんでした。もし生きていればもっと神様のために、家族のために、友のためにできることがあったはずです。それはモーセやヨハネに通じる人生です。なぜ、聖書は隠すことなくこのような人たちの事を記録しているのでしょうか。なぜ、祈り送り出されたトローゼン宣教師家族やイー宣教師にこのような最期が訪れたのでしょうか。

神に人生を捧げた人たちであるなら、受ける報いは大きくてもいいのではないかと誰しも思います。なぜ彼らは報いどころか、あまりにも早い最後をこの地上で迎えたのでしょうか。

ここで、思うことがあります。私は今、彼らが受ける「報い」について語っていますが、果たして私達が言うところの「報い」とは何なのでしょう

か。長寿でしょうか。その働きに見合った報酬でしょうか。人の称賛でしょうか。私達が普通に考える報いとは、おそらくそのあたりのことです。

しかし、聖書はこのような報酬をほんとうに価値あるものとしてはいません。この報酬についてヘブル書11章は私達に語りかけます。このヘブル書11章は信仰列伝と呼ばれる箇所、そこにはかつて神と共にその生涯を歩んだ者達の名前があげられ、彼らに共通することとして、こう書かれているのです。

これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした（ヘブル11章13節）。

ここに記されている「約束のもの」とはまさしく私達が今、言っている「報酬」です。すなわち、彼らはその報酬をこの地上では受けなかったということがここには記されているのです。この言葉に従えば、私達が考えるこの地上で考えている報酬は神の御目には報酬に値するものではないということです。本当の報酬はこの地上ではないところで与えられるということです。でも、そんなこの地上ではないところで与えられるといっても、それはいったいどういうことなのでしょう。あまりにも私達には飛躍した話のように思われます。

モーセ、ヨハネ、トローゼン家族、イー牧師がこの地上で送った生涯に対する「なぜ？」について聖書は何か答えを持っているのでしょうか。もし、このことに対して聖書が答えをもっていないなら、私たちの信仰は空しいものです。

聖書はこれらのことに対して答えをもっています。どこにその答えがあるのでしょうか。その答えは一つの出来事に集約されます。そうです、それはイエス・キリストの復活です。イエスの復活により、私たちにも復活の命が約束されているということ、そして、その復活の命を得た私たちはこの地上で歩んだ人生で経験する全てのことにおいて、最後に帳尻が合わせられるのです。

皆さん「帳尻が合わせられる」ということはどういうことなのでしょう。そもそも、この言葉はどんな意味なのか。それは帳簿に記載した収支決算の結果が最後にピタリと合わせられるということです。私たちのこの地上での生涯においては、まだこの帳簿の収支は出ていないのです。地上の生

涯においては、何度計算しても計算が合わないことがあるのです。それが私達の人生であり、時にそのことを私達は「人生の不条理」と呼びます。

今は分かりませんがかつて日本の銀行は午後三時で閉店しました。そしてシャッターが閉まった銀行の中ではその日に取引された金銭が銀行員によって整理されているのだと聞いたことがあります。そうです、インターネットやカード決済がない時代、銀行のシャッターが閉まり、職員だけとなった銀行では、その日に預けられた現金が計算され、その日の取引が帳面に記録されるのでしょうか。でも、もしその最後に370円足りなかったら、それがピタリと合うまで帰宅することができない。そんな時に自分の財布の中から370円を足して早く帰ることがあるんだよなんて聞いたことがあります。きっと、そんなことはないでしょう。あちこちを調べ、その足りない370円を見つけ出し、それらが加えられて、その日の帳簿の帳尻は合い、職員は安心して帰宅できるのです。

時に私達の人生の帳簿も私達の計算と合わないことがあります。このようなことは誰の人生にも一つや二つ、あるものです。そして、その時に私達は神を疑い、また神にたてつく事すらあります。しかし、私達は忘れていることがあります。この人生の帳尻は自分で合わせるのではなく、それは私達の人生の営業時間が終わった後に神がその帳尻を合わせてくださるということです。そして、いつの日かその合わせられた帳尻を前に、私達は神をほめたたえる日が必ず来るとというのが聖書の約束なのです。

まさしくそのことをパウロはコリント人への第一の手紙13章12節にこう記しているのです「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかし、その時には、顔と顔とを合わせて見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかし、その時には私が完全に知られているように、完全に知るであろう」。そう、私達が今、見ている人生の帳簿は一部分にすぎないのです。その時にはその帳簿を完全に知っているお方が、私達にその全容を完全に知らせてくれるのです。

時に私達の命はとてもはかないものです。私達は当然、明日もやってくると思って今日を生きていますが、その確証はどこにもありません。そして、不意にその日が来ますと、「なぜ、このようなことが起きるのか」と私達は打ちひしがれます。なぜなら、そのことを「その人の人生の結末」として、私たちは見るからです。

しかし、聖書は言うのです「その人の人生が、この地上でどれだけ長かったか、どんなものを獲得して生きたか、どんなに辛く、悲しい余生を送っ

たかということが、その人生の結論ではない」と。先ほどのヘブル人への手紙は言っていますでしょう。私達はこの人生において旅人であり、寄留者であるということ。その旅路では分からないことも私達の永遠の住処に帰る時に全て明らかにされるのです。

私達はその住処に帰宅する時、この人生の旅路で不条理に思えた出来事や疑問が全て解き明かされて「そうか、こういうことだったのか」ということが分かる日が必ず来るのです。そして、その日を私達が確実に迎えるためにイエス・キリストは復活されたのです。

すなわちイエス様が復活されたということは、私達にもその復活の命が与えられるということであり、その時には私達がこの地上で経験したことの背後にある神の御心を完全に知ることができるのです。

イエス・キリストが復活したということは、私たち人間が理解できない悲しみや不条理という疑問に神が目をそむけずに向き合っていてくださるということであり、その悲しみ、不条理を私は未解答のままにしておくことはないという神の愛です。

そして、驚くべきことに、これらのことは全て後になって分かるということではなく、私たちは今、生きているこの時にも、このことに確信をもつなら、全てのことはイエス・キリストにあって希望となって、その神の恵みを先行的に受け止めて生きることができるのです。

先にお話しました李宣教師の奥様は崔(チ)さんといいます。このチェさんが夫、李さんと病床で話した時のことを、当時、仲間がメールで知らせてくれました。彼女はあまりにも苦しむ夫の姿を見て、彼に尋ねたそうです。「あなたこの病気の中でもイエス様を愛しているの？」李さんはニコツとして「あー、私はイエス様を愛しているよ」と答えました。崔さんが、もう一度、聞きました。「あなた、こんなにも苦しんでいるのに(!)、本当にイエス様を愛しているの？」また、ニコツと李さんは笑顔を返して答えました。「ああ、私はイエス様を愛しているよ」。言い終えると、血圧が上がり、痙攣が起り、がくがく震え、その痛みで、李さんは気を失ってしまうそうです。その気を失っている夫を見て、崔さんは、思ったそうです。「この人は、本当にイエス様を愛して、そしてイエス様の愛を、なんとか、日本人に伝えたいと思っているんだわ」。

李さんは地上での自分のミニストリーを止めなければならない瞬間にいたのです。愛する家族との別れの瞬間に置かれていたのです。しかし、李さ

んの心にはイエス・キリストの愛に対する絶大な信頼がありました。なぜですか。なぜなら、イエス様も李さんと同じところを通られたところです。背骨が露出するほどにムチ打たれ、両手両足に釘が打たれたイエス様の肉体の血圧は乱れ、気絶するほどの痛みに全身が震え、度々、気を失われたイエス様、しかし、その十字架を通られ、一度、死ななければ私達に復活の命を与えることができないということを知っていたイエス様。このイエス様の愛を李さんはその病床でも疑わなかったのでしょうか。

彼のイエス様に対する信頼とは自分のために十字架にかかれ、そして、自分のために死を打ち破り、よみがえられたイエス様に対する信仰と希望であったのです。私は思うのです。その彼の信仰は「たとえ私が今、このような形で全てに別れを告げなくてはならなくとも、神様は全てを最善に、帳尻を合わせて下さるお方なのだ」という神への信頼ではなかったかと。

皆さん、もし、皆さんの心の中に、自分の人生を振り返り「なんて自分は不幸なのだ」とか「あの人の人生はいったい何だったのか」というような疑問を持っている方がいるとしたら、その方は今朝、知ってください。全ての答えは今日、このイースターにあるのです。あの女性達が目の当たりにした空の墓にあるのです。主イエス・キリストが復活なさったということが、これらのことの答えなのです。この事実がある限り、私たちの現在の人生に対して、私達は結論を引き出すことはできないのです。その一人子を与えるほどに私達を愛された父なる神は、最後に必ず、私達の人生の帳尻を合わせてくださるのです。このことを信じて、やがて私達の名が呼ばれ、父が待つ家に帰る、その日まで、この地上での旅路を主と共に生きる者はさいわいです。お祈りしましょう。